

背中を押して

泰然自若

空は、『どんよりと』、なんて言葉が似合うほどに雲が垂れ込み、僕を陰鬱な世界へと誘ってきているかのようだった。僕は一人、地面よりも高い位置から暗闇に覆い隠されている世界を見上げていた。

本当に寒いと素直に思えるほど風は冷たく、僕の身体を撫でていった。全身が熱を求めて震えていようとも、効果は薄く身体が冷たくなってきていたが、気にする事も無く、吹かれるまま、凍えるまま、震えるまま、僕は世界の中を歩いた。

白い塗料で染められた金網の柵は芯まで冷え切っていて、氷のようだった。僕は握りこぶしが入るほど大きい網目に指先を掛けて、身体を揺らしながらもしっかりとした足取りで、その金網を乗り越えた。

僕は、せり上がったコンクリートの上に両足を乗せた。指先の感覚が消えていたので、少しばかりもたついてしまったが無事に降り立つ事はできた。

吹き荒れる風は、怒りに打ち震えているようにビルの際間を通しては何処かへ消えて行った。耳障りな音をかき鳴らしながら、その風は何処を目指していったのだろうかと思いを馳せながら、僕は目に見えない風を、適当に追いかけて、隔たりの無い高所から視線を這わせるように、立っているコンクリートの端から見える世界の果てを眺めた。

薄暗い世界が広がっていた。無機質で無個性で、でも落ち着いていながらも気だるそうな世界だった。

目の前には何の変哲も無いビルが伸びていて、窓から非常階段を示す緑色の薄気味悪い光が見えるくらいで、人が居るようには見えなかった。

そんな世界を眺めながら、僕はどんな気分だったのだろうか、と考えていた。何度もしたけれど、未だに答えが出てきたためしもなく、彷徨い続けている自問自答だった。

僕は笑った。少なくとも、今の僕と同じような迷子みたいな気持ちではなかったことだけは確かだ。

何せ、僕はどうしてビルの屋上から眼下を悠々と移動する自動車を眺めつつも、つま先を宙に投げ出しているのか、あまり理解していなかったからだ。

ただ、こうすれば少しは気持ちを判ってやれる、そんな独りよがりのためにやっているのだから、やっぱり僕は気持ちを判ってやれる事は、なかったのかもしれないと、自嘲めいた笑みを浮かべてしまった。

腰が引けているけれど、僕のつま先は世界の果てから顔を覗かせている。怖いのだろうかと思えるくらいに、僕はまだ理性を保っている事を心のどこかで安心していた。

それでも、僕の思いは変わっていなかった。

「そんなところで何をやっているのかね」

好きだったんだろうと、この世界の果てで佇みながらも僕は思った。

「飛び降りるならさっさと飛び降りれば良かったな」と小父さんが言った。

「かれこれ、二十分か？」

背中ごしに聞こえてくる声は聞き覚えがあった。

きっと想像よりも軽い錆びた扉に、体重を掛けるように腕で抑えながら、斜めに立っている小父さんが呆れた顔をしながら僕の、背中を見つめているのが想像出来て、頭の中に光景が浮かんできた。

「勇気が無いんですよ。背中、押してくれます？」

僕は振り返る事もせずに、後ろへ声を掛けた。

「私に、自殺幫助の罪でも着せたいのかね」

「犯罪になりますよね」

そう言って、僕は笑った。

「下手をすれば、殺人罪だな」

「僕に完全犯罪は無理ですよ」

本当に、僕は笑い顔を作れているかはわからないけど、とにかく笑った、声を出して笑ったけれど、予想よりもずっと乾いた笑い声が出て、僕は気まづくなった。

その気持ちを察したのかは判らないけど、小父さんの声は明るかった。

「立て続けに死なれても困るからな」

嫌味には聞こえなかった。それでも、本音なのだろうとも思えた。誰だって、同じ場所から同じように死なれては色々困るはずだ。自殺の名所になったり、悪い噂が立つには持って来いの事実が出来上がっても、おかしくはなかった。

「ご迷惑をお掛けしています」

「まったくだ」と伯父さんは言った。

「それでも、些細ながらも良かったと思える事もある。怒るかも知れないがね」

「怒りませんよ。別に」

どうでも良い話だった。

僕にとって、伯父さんは他人で伯父さんの事なんてどうでも良かった。たとえ、今ここから伯父さんが飛び降りたとしても、僕は何も思わないという妙な自信すらあった。

「悪い虫が消えた。それだけだ」

そんな僕の考えなど知りもせずに伯父さんはそう言った。粘つくような声だった。

「そうですか」

素っ気無い態度を、訝しがったのかもしれないけれど、伯父さんは口を開いた。

「爺が、人生相談でも乗ってやろうか」

「それほどお歳を召しているようには見えませんが」と僕は言った。

小父さんはどう見ても、爺さんと呼べる姿ではなかった。少しお腹が出ているだけで、五十台前後に見えた。

「褒めても背中を押さんからな」

小父さんは呆れながらそう言った。

今のはお世辞でもなく、本当に見たままを言っただけだったけど、小父さんに出会ったのは、三週間ほど前のことだったので、三週間分、僕が顔を拝見した時よりふけてしまっているのかもしれないなかった。

それでも、今の言葉に深い意味はないけれど、小父さんは何処か嬉しそうだったかもしれないと思い込む事にした。

「辞めておきますよ。貴方に罪を着せるつもりはありませんから」

軽口のもりじゃなかったけど、小父さんは僕の言葉を聞いて困ったようにため息を吐き出したような気がした。

「なら、別の場所で死んでくれ。変な噂が立つのは困る」

面倒くさそうな声だった。僕も凄く迷惑な行動をしていると自覚はしていた。けれど、止めようとは思わなかった。

「善処しますよ」

三週間ほど前の出来事だった。新聞に小さく記載された記憶も残っていたし、その出来事から僕の人生は加速して、今に至ったという事も自覚していた。

「取り合えず人生相談は辞めて、説教でもしてやるか？」

一人の女がこのビルから飛び降りた。

今日みたいにどんよりと雲が垂れ下がっていた。違うところと言えば、雪がちらちらと舞っていた事だろうか、などと考えてみた。

「ほどほどにお願いします」

あの日、雪が舞う中で女は笑って飛び降りた。あの笑顔は涙で濡れていたはずなのに、どうしたって綺麗だった。

僕にとって最後に見た姿が笑顔だったのは幸運なのか、それとも不幸だったのか、と何度と無く考えては、答えが出ずにここまで来ていた。

とにかく、僕はその笑顔に憑かれてしまった事だけは確かだった。こうして、足繁く自殺現場に通ってビルの管理人と思わしき小父さんとも顔見知りになってしまったのだから、憑かれているという言葉はしっくりきていた。

「僕はどうしたら良かったんですかね」

何気なしに呟いた僕の言葉に続いて、タバコの臭いが漂ってきた。

「どうしたいんだ？」

小父さんはタバコに火を点けて、そう答えたようだった。

その言葉に、僕は押し黙った。勇気も無いのに、僕は死のうとしていたのは事実だったし、実際どうしようか本当に迷っていた。人間として間違っただけの行いをしたという自覚もあるけれど、だからといって大人しくするべきなのかも、判らなかった。

「どうしたいんでしょうかね」と僕は言った。

「どうしたいんだろうな」

小父さんもそう呟いた。

奇妙な掛け合いをしながら、僕は世界の境界に立っていた。

一步も踏み出す必要は無く、半歩も足をすり出せば、僕は十階のビルの屋上から落ちて行き、アスファルトの黒い大地か、点字ブロックが伸びる歩道の上に醜い死体を晒すだろうけど、下を通った人に当たらなければいいな、と他人の心配をしているのだから、死ぬ気はないのかもしれないと言えた。

「何があったんだ」と小父さんの声が背中ごしに聞こえた。

その言葉の軽さに、口が滑った。

「色々」と

僕は小さく呟いた。

初めて小父さんはそう投げ掛けてきた。今まで、何度か同じ場面を経験していたけれど、今日だけは何処か違っていた。

一体、どういう風の吹き回しだろうかと、訝しがってみたが、判らないものはどう考えたって判らなかつた。

「逃げ道だけは上手く残すもんだな」

小父さんは笑った。

「そうかもしれませんね」と僕はため息を吐いた。

逃げ道だとは考えた事はなかつたし、きっと伯父さんは挑発したつもりだったのかもしれないなかつた。だけど、僕には何の意味も無かつたはずだつた。

「死にたい理由は色々ありますよ」

きっと小父さんは、今度こそ僕が飛び降りると、思ったのかもしれないし、いい加減、死ぬなら死に、死なないなら死なないで決めて欲しかつたのかもしれないなかつた。

「そうか」

風がより一層、強く吹き荒れた。煩い音に、顔を顰めつつ僕は身体は体温が失われていくのを感じていた。このままいけば、凍死するかもしれないと本気で考えていた。

「私も随分、死のうと思つたが、未だ死ねていない」

そんな僕の考えを他所に、昔を思い出しているような口ぶりで小父さんは言った。

誰も一度は死にたいと思ひ描くものなのだろうかと質問したかつた。それこそ、夢を見るように思ひ描くもので、もしそうだとしたら、今の僕が飛び降り自殺をしようとしてビルの屋上に昇り、つま先を虚空に行動する事自体、何も問題は無いはずじゃないかな、と思つたからだけれど、僕の口から零れたのは別の言葉だつた。

「小父さんは、人を殺そうと思つた事がありますか」

どうして、こんな話をしようと思つたのか、判らないけれど、とにかく口はそう呟いていたし、出てしまった言葉を訂正するつもりも何故だかなかつた。

小父さんは僕の言葉を聞いてから、少しだけ間を開けていた。ゴミ屑を踏んづけて歩いたのかもしれないけど、小さな雑音が後ろから聞こえた。

「幾らでもあるさ」

きっと、振り返ればおじさんのふて腐れたような顔を拝めたかもしれないと思つた。それほど、ため息に近い声に聞こえた。

「僕もありました」と僕は答えた。

「沢山かどうかは判りませんが、覚えている限りに両手に収まる人数で」

思い出せるものもあれば、思い出せないものあつた。どうしてか、しこりのようなものが残つてしまつた。自分で言つた言葉なのに、僕は何か忘れ物をしているような違和感に苛まれてしまつた。

「そうかい」

小父さんの声が近寄ってきていた。

近づいてくるのが判るのは、じゃりじゃりと、わざとらしく音を立ててくるからだった。

「これ、羽織ると良さ」

金網の上から雑音を響かせて、渡されたのは一着のコートだった。

「いいんですか？」と僕は言った。

高そうな黒いコートだと思った。

「気にするな。だが、死ぬときはきちんと脱ぐように」

戸惑いはしたけれど、受け取らなければ悪い気がしてしまった。

「判りました」と僕は手を伸ばしてコートを受け取った。

羽織ると暖かくは無かった。もしかすると小父さんが僕のためにわざわざ持参してくれたものなのかもしれない。

サイズは大きめだったけれど、寒さを凌ぐには丁度良かった。

「それで、小父さんは、殺そうとした人をどうしました？」

僕は、コートを羽織って襟を立ててからそう聞いた。

「大人には我慢が必要なんだよ。目先の衝動に駆られても我慢する必要がね」

その言葉には、はっきりと諦めが込められていたように僕は感じた。

「ただ、覚悟を決める必要もあったんだ」

辛い事があった。だけど、我慢しなければならなかった。それこそ、大人として守るべき何かを小父さんは守ったのかもしれない。

何故だか僕は笑っていた。小父さんの言葉には、それだけの何か秘められている気がした。

「人を、殺したんですよ」

どうして、僕はこんな話を小父さんにする気になったのか判らないけれど、僕の中では戸惑いこそあれど、違和感は無かった。

「そうか」と小父さんは答えた。

思ったより、小父さんの反応は小さかった。その事が余計に、僕の口を軽くした。

「何故でしょうかね。こんな話をしたい気分になってしまうのは」

吐露、とでも言えば良いのかもしれないけど、僕はそれとは違うような気がしてならなかったし、ましてや感傷なんてものでもなかった。じゃあ、なんだと思ったところで、僕に確実な答えなんてありはしなかったけれど、僕はこれから語る事になる事だけは確かな事だった。

「自慢じゃないが、学生時代は良く後輩の愚痴を聞いてやっていた。その経験が活きたかな」

本当かどうかは判らないけれど、小父さんは少しだけ機嫌が良さそうだった。

思わず、僕は苦笑いを作った。

ビルの屋上で自殺しようか迷っていた殺人犯と、その犯人の供述を聞こうと思った小父さんという、奇妙な光景が広がっていた。

「後輩の愚痴、聞いてくれますか？ 人生の先輩として」

「今の流行なんかは、はっきり言うと疎いぞ？」

「他愛も無い話ですよ」

屋上から見る景色は無個性で何の変哲もない世界だった。あの時と変わらない、変わった事と言えば、天候と、僕が今居る場所から女が飛び降りて、僕が小父さんがいる辺りで一部始終を見ていたという違いだった。

「ただ、人を殺しただけの、他愛も無い話です」

僕の半生を一言で言い表すならば『平凡』の二文字ほど似合うものはないと自負しているが、その自負に基づけられているものは、何処にでも居る共働きの両親に、姉と僕の四大家族だという事だ。それに、市営の集合住宅に住まう一家だったという事と、僕が平凡な幼少期を経て、平凡な義務教育を謳歌したという事実からだった。

ただ、僕自身を『平凡』と評する一方で、僕の家庭が『平凡』だったのかと問われるのなら、迷わず僕は、『NO』と言うはずだ。

父親は大手でもないがそれなりに大きい金融関連企業に勤めて、朝早くに家を出て、夜遅くに帰った。母親は、僕が小学校に入ると仕事に復帰し、OLとして中小企業の事務に励んでいた。

それは、確かに家族と呼べる構成だったと思うし、他人から見れば典型的な家庭だと思うはずだ。外からは間違っていないけれど、中に居る僕と姉さんからすれば間違いだらけだった。

家族と言っても、仲が良かったわけじゃないとはっきり言えた。かといって、冷え切っていたとも言えないので、言葉を選ぶならば、煮え切らない関係が適当な表現だった。

両親はこぞって父と母を演じていた。その裏で、父は会社の女同僚を愛人にして遊んでいたし、母も携帯電話の出会い系で知り合った男と遊んでいた。

どうして、二人は結婚なんてしたのだろうか、息子である僕が思うほど、二人はお似合いには見えなかった。演じなければならぬ結婚に何の意味があったのか、僕は知らないけど、両親の実家へ帰った記憶は、僕がまだ五歳の頃に一度きりで、確か父の実家だった。

そんな役者顔負けに演じている二人なのだけれど、きっと二人は互いの遊びを知っていた。だけど、暗黙の了解にして仕舞い込んでいたんじゃないかと言えるほどに、稚拙な隠蔽工作を行っていた。いっそ、全てを曝け出した方が良好な関係を築けたかもしれないが、お互いに、問いただす事もしなければ、携帯を見たりするような事もなかった。

見たくないものには蓋をするというその典型で、僕と姉さんはその微妙な閉塞感の中で育てられた。けれども、生活に憤るほどの不満があったといえ、僕は少し言葉に詰まってしまうのだ。

母を演じている女性はきちんと育児をしてくれたし、家事もそつなくこなした。父を演じている男性も働いてお金を家に入れてくれていた。そのお陰で、僕は貧乏だと思った事もなければ、裕福だとも感じた事は無かった。

一般的に見れば、恵まれているだろうと気づき始めたのは、小学校で自分の立ち位置を気にし始めた四年生あたりだった。

学校という大人社会から隔離された、ある程度の秩序を求められる社会の中に、長い時間置かれ、僕は多種多様な人間が居る事を知ったし、彼らには彼らの様々な家庭事情を内包している事も知る事ができた学校はそれなりに楽しいと感じ、学業以外でも勉強にもなった。

ただ、その環境の中で、僕は学校の授業参観や運動会といった両親を連れ立った行事だけは、どうしても好きにはなれなかった。

クラスメイトの両親が笑いながら我が子を見つめる独特な視線や、家族同士のかもし出す空気

が苦手で、羨ましかった。

どうして、僕の家はあんなにちぐはぐなんだろうかと、小学校の頃は良く悩んでいた。それでも、家族という世界を壊したくは無かった僕は、平凡な息子を演じ続けた。それなりに駄々を捏ねて、それなりに迷惑を掛けて、それなりに褒められる事をした。

全てにおいて平均化されたであろう僕の生活は、誰からも強く批難されることはなかったが、誰からも注目される事も無く、決して広くなく、僕の手が届く交友関係を築き、勉強も真ん中で、運動もほどほどという人生を歩んでいた。

その事に後悔は無いし、きっと過去に戻って人生をやり直せると言われても、同じ道をただ歩くだけになるという自信があった。

そうして今では高校生になり、僕は何事も無く日々平穏と生活して来る事ができた。人並みの生活に満足は一応出来ていたし、役者を目指してみようかな。などと戯言を考えられる程度の余裕は持てるようになっていた。

夏休みに捕まえて自由研究に使ったカブトムシだって、僕の与えた虫籠という新居で、もう少し変化のある日常を過ごしていたんじゃないかなと思うほど、僕と姉さんは閉塞感に苛まれ続けていた。

息が詰まりそうだと思い続けてみても、その環境に僕は適応していったのは紛れも無い事実だった。人間はどんな環境でも適応できるらしいけれど、まさか実体験する事になるとは思いもしなかった。けれども、全個体が適応できるとは限らないという事を、『平凡』な息子を演じていた僕に教えてくれたのが姉さんだった。

僕の余裕は、きっと姉さんが変わってから僕自身に起こり始めた、最初の変化だった。

姉さんと僕は二つ違いで、小学校の頃から、僕は姉さんにべったりというわけではなかったけれど、それなりに仲が良かった。

他愛も無い話をする事もあれば、勉強を教えてもらい、教科書のお下がりを貰ったりした。それだけだ。姉さんとは部屋も別々だったし、趣味も違った。

長い黒髪の女の子で、静かな姉さんでしかなかった。共通点と言えば、静かなところだけだ。僕と同じように、姉さんもきっと、姉という役割を自然に演じていたはずだった。

そんな姉さんが中学校に入ると突如として、それまで常識だと思っていた静かな姉さんという認識を打ち破り、まるで未知の生命体に乗っ取られたみたいに変わっていった。

今まで、真っ黒だった髪の毛を茶色に染め始め、一学期の早々から両親は学校に、呼び出されるようになった。

当然ながら、両親による家族会議も行われたが、まったく効果は無く、姉さんは自由奔放な生き方を満喫するかのよう、夜遅くに帰って来ては、両親に怒鳴られていた。

素行不良で何度も補導されていたし、中学生でアルバイトまでしていた。それでも、姉さんはそこそこ頭が良く、成績も悪くは無かったのだから、学校の先生達からすれば、本当に心配してくれていたのかもしれない。

ただ、両親は姉さんが変わっても、両親という役を演じているだけで、大きな変化は無かった。怒る事も今までと変わりは無かった。上っ面だけで、本当はどう思っているかも判らないのに

、声を張り上げて尤もらしい言葉を並べ立てた。言葉は間違っていなかったのは確かで、僕も両親の言葉にだけは同意できると思ったけれど、だからといって、中身が見え透いている言葉ほど、相手に届かないものだ。僕はその光景を滑稽だと思い、親を演じ続ける二人に驚き、この人たちは筋金入りだと感じた。

これなら、両親が実は未来からやってきたアンドロイドと言われて紹介されたほうが、とても好感を持てた。

僕の両親は未来からやってきたんだ。プログラム通りにしか動けないけど、僕達をきちんと育ててくれている大事な家族なんだ。

友達にも絶対、そっちのほうが自慢できた。

両親だった二人は、意固地になっているのかもしれないとさえ思った。けれど、今から振り返るならば、僕と同じだったのかもしれないと、考えられるようになった。

演じる事が日常に成り過ぎて、本当の自分が見つけれなくて、仕方なく演じるという行為で自分自身を保っていた。それが、両親という役割で、父だった男は愛人を作り、母だった女は遊び相手を探し続けた。

とにかく僕は、両親に変化が無い事に興味は無かったけれど、姉さんが心配になった。中学校に入ってから姉さんはどこか、不満気で悲しい顔を見せた。今までも何度かあった事は否定できない事実だったけれど、中学校に入ってから姉さんが見せる悲しい顔は、はっきりと種類が違うと言えた。

正直に言えば、それが良く判らなかつた。それでも、姉さんの悲しい顔を見て、僕も同じように悲しい気持ちになって、何とかしてあげたいとも考え始めていた。

多分、それからだ。

僕は、姉さんと話す機会が増えたし、姉さんは姉さんで、三年生になると勉強に執心していた。何かを振り払うかのように、必死になって勉強し始めていた。

そんな姉さんに憧れていたのは決して、嘘ではなかつた。

学校の帰り道だった。

姉さんが中学三年生で僕が一年生だった。

僕にとっては当たり前だと思っていた事が、どうやら、学校としては珍しかった事のように、暫くの間、俄かにざわめき立つ学び舎へ登校する事になっていた。卒業を控える三年生、その中で話題に挙がっていた人物が姉さんだった。

今まで、部活動で沸いた事があったようだけれど、学業でここまで騒がれた事はなかったそう。

素行不良で何度も補導され、生活指導されていた姉さんが、県下有数の進学校への入学を決めたからだ。

今まで、僕の居る学校からその進学校に行った人は両手に納まる程度だと、母校で教鞭を揮っている僕のクラスの担任が言ってきた。

その顔は、あからさまに僕への期待が込められていて、迷惑極まりない事だったけれど、我慢できないほどではなかった。

姉さんの合格が知れ渡ってから、学校は俄かに騒々しく揺れていた。どうして、ここまで騒ぎ立てる事が出来るのか僕には判らなかったけど、姉さんはその全てを受け止めているようだった。今までの付き合いづらは影を潜め、クラスメートでは笑顔が見えて、皆に優しく、先生受けも良くなった。姉さんはきっと、変わろうとしているんだという事が良く判った。他人から見ても、不良が優等生になったのだから、そう思うのも不思議じゃないけれど、僕からすれば、少し意味合いが違って見えていた。

とにかく、姉さんの下駄箱にラブレターが入るようになったし、先生もやたらとおべっかを使い始めた。

僕にも、その余波がやってくると、学校に行くのが少し面倒臭く思うようになった。今まで、注目されてこなかったのが、普通で当たり前だったから、皆からの質問や会話に気分が悪くなっていた。

先生の掌返しを適当に避けながら、姉さんは「帰ろう」と言って、そんな状態だった僕を教室から連れ出したのは、僕のクラスでホームルームが終わった直後だった。

皆からの視線が恥ずかしかったけど、姉さんはそんな事に構う人じゃない事は良く判っていたから、僕は大人しく手を引かれて教室を後にした。

下駄箱にまたラブレターが入っていたらしいけど、姉さんはそれを破って、近くにあったゴミ箱に捨てていた。

いつもの通学路を久しぶりに姉さんと二人きりで歩いていた。これまで何かと渦中にいた姉さんを僕は遠巻きに眺める程度だった。勿論、僕にも被害はあったけど、姉さんに比べればどうってことなかった。

だから、僕は姉さんと登校することはあっても、下校する事はめっきり減っていた。

僕と姉さんは横並びに歩いて、少しだけ姉さんが前を歩いていたから僕は肩越しだったけど、その横顔を眺めてみた。

どういう意味で、あんな暴拳をしたのか知りたかった。姉弟という事は知られているけれど、手を引っ張って出て行ったという事実で、僕は明日から暫く友達と称する人々から質問攻めにされる事は半ば確定事項だと考えていたからだ。

憂鬱になりながらも、僕は黙々と歩いた。

校門を出ても、姉さんは僕を連れ出す時の一言以来、喋らなかった。

淡々と過ぎ去っていく景色と、車道を走り去る自動車に視線を向かわせながらも、僕はその沈黙に耐えようか迷っていた。誘ったのだから、姉さんには何か僕に話すことがあるのだろうとは思っていたけど、どうやら、姉さんも迷っているような気がした。

町の喧騒が、いつもより大きく聞こえて、僕は変な脅迫観念に襲われた。元々、ちっぽな存在だった僕がもっと小さい存在になって、それこそ小人みたいになってしまうのではないかと、漠然ながらそんな考えが浮かんできた。

何処かで、自動車のクラクションが鳴っていた。

「姉さんがここまで勉強出来るって知らなかった」

沈黙に耐え切れなくなって僕は、急かされても居ないのに慌てて声を出していた。

「今度、勉強教えてよ」

僕は何かに焦っていた。それが、姉さんによるものなのか、僕自身によるものなのか、はたまたこの町が僕を急かしてくるのかは判らなかった。だけど、僕は努めて明るく喋っていたし、心なしか口早だった。

「小学校の頃は良く教えてもらっていたけど、やっぱり中学の勉強は難しくなってくるから、姉さんに教えてもらえたら、僕も今よりは成績が上がるんじゃないかなって思って。ほら、元々勉強が出来るわけじゃないし、中学入ったからには少し、頑張ってみようかなって」

「今のままで楽しい？」

姉さんは僕の早口言葉みたいな喋りの一切を無視して言った。

何の事を言っているのか良く解らなかったけれど、僕の会話が悪かったわけではないようだった。

「どうしたの？」

僕は姉さんの横顔を見ながら言った。姉さんは無表情と言うよりは時折吹く、冷たい風に嫌気が差しているのか判らないけれど、顔が堅い印象を僕に持たせた。

「今の生活を楽しいかと聞いているんだけど、どうなの」

顔と同じように堅い口調だった。

一気に張り詰めた空気が、世界を包み込んでいくようだった。

「学校生活は楽しいよ。友達だっているし、先生だって眼を掛けてくれてる。姉さんのお陰だよ」

嘘を付いた。

姉さんが進学学校行きを決めてから、やたらと先生方から指導を受ける事が増えていた。それに、友達も何かと増えた。浅い付き合いに変わりはないけど、居ないよりかは居た方がやっぱり楽しいという思いは確かにあった。だけど、やっぱり嫌だった。

僕を本当に見ているか判らないし、僕は僕でこれまでの生き方と、今の状況を比較してみたけど、どうしたって合わないと思っていた。

「家は」と姉さんが言った。

「満足なの？」

姉さんは僕を見ず、ただ真っ直ぐと帰り道の先に顔を向けたままだった。

僕は今までの生活を思い出してみようと、視線を道路に落とした。考えたところで今までの家庭生活を満足なのかどうかと言われれば『NO』だとも言えるし、『YES』だとも言えた。どちらの答えも正解だと感じている僕が居て、どうにも発言に困ってしまった。

姉さんは考える僕に口を挟む事はせずに、黙って歩いていた。

「両親が離婚して、お母さんと二人で暮らしている健太君っていう、僕の友達が居る。それから、お父さんの顔を知らない女の子を僕は知っている。だから、満足と言えそうだと思う、かな」

僕は、考えに考え抜いた答えを喋りきった。納得できる答えではなかったけど、これが一番無難だと思った。

「客観的に物事を見るのは止みなさい。今の生活、疲れないの？」

姉さんはため息を盛大に吐き出していた。どうやら、正解ではなかったようだ。何よりも、両親が演じている事と、僕が息子を演じている事について、言われている事は良く判った。

「慣れたのかな」

本音だった。僕にとって、今の生活は慣れてしまっていた。姉さんには判らないかもしれないけれど、僕にとってはもうこれが日常になってしまっていた。

「だから、本当はどうしたいかを聞いているの」と姉さんはイライラしたように言った。

判らない、それが本当の事だった。だけど、口から出る事は無かった。

「姉さんはどうしたいの」

答えに詰まったと思われたくなかったのもあるけど、僕は、姉さんの回答に興味があったから、逆に問い掛けてみた。

「変えたい。いえ、逃げ出したい」

姉さんは、はっきりと言い切った。

なるほど、僕はそう小さく呟いた後、姉さんの一瞥に気が付いて目を合わせた。

じっと見たことが無かったけど、真っ黒な瞳がキラキラと輝いていた事を知った。その顔と瞳を見つめていると、僕がキザったらしい事を言うなら、宝石みたいに綺麗だと思った。口には当然、出さなかったけど、とにかくふとそう思って、僕は視線を外した。

その事を気にする様子も無く、姉さんは口を開いた。

「だって、息が詰まるじゃない。気持ちの悪い低レベルな演劇を、毎日見せつけられているのよ？ ただでさえそんな日常にうんざりしているのに、中途半端な演技のうえ、中途半端な隠ぺい工作。何がしたいのって思わない？ そんなに隠したいなら、きちんと隠せば良いじゃない。あれじゃ、見せつけられている気がして、私は耐えられない」

その言葉に、姉さんは中学に入ると羽を伸ばした鳥のように自由を満喫しようとしたわけだった事を知った。

「だけど、やりすぎじゃない？」と僕は言った。

補導された回数は両手に収まりきれないし、学校に両親が呼び出された回数も同じくらいだ。その問題児たる姉さんを三年間、面倒を見続けた義務教育は凄いと思うし、これだけ振り回されても、親を演じ切った父と母には変な感心すら覚えていた。

僕なら、さっさと縁を切ったりするだろうと思うし、そうしなくても、きっと施設かなんかに放り込んだりするかもしれないと思った。

僕でもそう思ったんだから、両親だって考えた事はあるはずだ。それをせずにじっと演じてきたのだから、少しくらいの感謝はしても良いと思った。

「これくらい普通だわ。罰すら当たりっこない」と姉さんはふて腐れたように言った。

「知ってる？ 父を演じている男は今年で三人目よ、三人。今年はまだ二ヶ月しか経っていないっていうのにもう三人。私の知る限りだからもっと多いかもしれない」

最初は何の事なのか判らなかった。

僕の心を見透かしたように、姉さんは少しだけ間を開けてから捲くし立てた。

「愛人の数よ。今年遊んで付き合ってきた女の数」

父を演じている男性は、職場が女性に恵まれているようで、良く女性を代えて遊んでいる事は、周知の事実だったから、僕は特に遊び自体には驚かなかったし、何人居ようと、素直に父を演じている男性に変な尊敬にも似た念を向けた。僕は男だけど、意地になっていると思われるほどの女遊びをしたいとは思えなかった。まだまだ子供だからかもしれないけど、そう思った。

驚いたのは、そんな事じゃなかった。

「どうしてそんな事知ってるの？」

姉さんがどうしてそんな事を知っているのかという事だった。

「この町のラブホテルは一箇所に集中していて、そこを縄張りになっている不良集団が居るの。私は夜にバイトをしていたし、同じバイトをする仲間はその集団と繋がりがあって、私はそのバイト仲間と親しかったの」

とんでもない事を知らない間にしでかしている姉さんに、僕は心底、驚いていた。

この人の行動力は何処から湧き起こってくるのか、本当に不思議だった。

「ついでに、母を演じている女はラブホテルを利用していなくて、駅前のビジネスホテルを使っているの」

「そっちも同じような手で？」

「そっちも同じよ」と姉さんは言った。

「凄いや」と僕は言った。

「スパイ映画やギャング映画みたい」

僕の言葉に姉さんは不機嫌そうに眉を顰めた。

「で、いつまで息子を演じるつもり？」

「いつまでって、両親が死ぬまでかな」

「はあ？」と姉さんは呆れた声を出した。

「少なくとも、僕はまだ中学生だし、無茶をする姉さんみたいに行動力があるわけじゃないし、頭も良くない。だったら、演じてでも安定した生活をしていたい」

僕が今、一人で社会に放り出されたら野垂れ死ぬ自信が、情けないけどあった。折角、両親が形だけでも居るのだから、加護を受けられるまで精一杯受けようと思っていた。

中学校を卒業して、高校に入るかまだ判らないけど、どうしたって働く事になるのは避けられない未来で、就職できるまでは両親の力に頼りたいし、たとえ就職できなくても、今の両親なら僕を養ってくれそうな気持ちもなんとなくだけどしていた。

ただ、そう思っている、そんな事は口が裂けたって姉さんには言えなかった。

「本当に中学生？ 達観しすぎじゃない」

姉さんは、口を尖らせて不機嫌そうに僕を見た。

「無茶をする姉さんが居るから、僕はひっそりと生きる事を目標にしたんだ」

「はいはい。破天荒な姉で悪かったわね」

「でも、嫌いじゃないよ」

「えっ？」と姉さんは言った。

「僕は姉さんの弟で良かったと思ってる。演じている家族だったとしても、姉さんの弟になれたことだけは良かった」

本当に、これだけは感謝できると、胸を張って言えると思った。

嫌いじゃなかった。一緒に居て疲れるけど、嫌いじゃないと感じられたのだから、満足できる疲れ方って、やっぱりあるんだと知ったし、その満足は姉さんに勉強を教わった小学校時代が初体験だった。

「弟にしては、随分と生意気な口を利くわね」と姉さんは僕の顔を見ながら笑った。

「そうかな？」

「そうよ」

「でもね、ありがとう。頑張った甲斐があった」

前を向き直して一緒に歩いていた姉さんはそう言って微笑んでいた。

どうしてか判らないけど、不思議な気分だった。

「そう？」

「そう、アタも頑張って勉強しなさい。そして私のところに転がり込んできなさい」

「転がり込むって、察でしょ。無理だって」

「男気を見せなさいよ」

「だったら勉強教えてよ。どう考えても、自力じゃ無理だし」

「頭の悪さは自覚してるのね」

「僕より悪い人はいるけど、僕より良い人の方が多い」

「もう少し、集中したら？ 日常で演技なんてしているんだからそれくらいできるでしょ」

「生きていくために、何が必要なのか判らなくなるんだ」

「変に、頭が堅いわね」

そう言って、姉さんは呆れたような笑みを浮かべていた。

「良いわ、ただしビシバシやるわよ」

「お手柔らかにお願いします」

学校の帰り道だった。

家族というものを演技なしで接し合えたと、僕は心の底から思っていた。とっくに諦めていた生活だった事を経験する事ができた。

幼い頃から感じていた閉塞感から解放された快感を覚えた僕は、姉さんが寮に移るまでの一月ちょっとほど充実した人生は無いと思えた。それほど僕が家族生活を満喫した日々だった。

毎日、家に帰れば姉さんに勉強を教わり、他愛も無い世間話をして、姉さんがどんなバイトをして、どうしてお金を集めていたのかを教えてもらい、どんな悪い事をしてきたかの武勇伝を聞かされた。

姉さんはただ、家に帰りたくなかったからそうした無茶をしていた事を知れた。稼いだお金で、欲しい物を買うわけでもなく、貯金する金額を決めて、将来のために溜めている事を知った時は本当に驚いた。

僕は、姉さんが学校でモテる事を知らせてあげたり、逆に僕が女子の先輩から可愛がりたい後輩一位だったとか聞かされたり、とにかく今まで溜め込んできた何かを二人して吐き出そうと躍起になっていたのかもしれない。

両親は相変わらずだったけど、姉さんが進学校に行く事を素直に喜んでいたし、僕が勉強に真剣さを見せ始めるのも嬉しそうだった。

だから、あの時だけは本当の家族みたいな日常だった。

例え、それが仮初めだと言われようと、僕にとっては最初で最後の家族生活だった事に変わりは無かった。

もしかするならば、世界は変わってくれるんじゃないかと思える事もできた。

あれから、姉さんは何事も無く高校に入学し、寮から通学を始め、それなりの交友関係を持ちながら、高校生活を満喫しているようだった。

寮の規則は厳しいけれど、とても楽しいと言っていた姉さんの声は、本当に生き生きとしていて、僕までもが嬉しい気分になった。

僕は、姉さんに短い間だけど、勉強を教わったお陰か、それとも、元々優秀な頭を持っていたのか判らないけれど、とにかく成績がぐんぐん伸びて、ちやほやされるようになった。

最初は、物凄くストレスを感じたし、姉さんに電話越しで愚痴を聞いてもらった事が増えたけれど、今ではその生活にも慣れて、それなりに面倒臭いと感じつつも楽しい中学校生活を送れたと振り返る事もできていた。

姉さんと同じ高校へは、ギリギリだったかもしれないけど、とにかく合格できたし、先生達も、両親も喜んでいて。何より、僕も頑張った甲斐があった。これで、姉さんに胸を張って会いにいけるはずだと思った。

僕の学校生活は大きく変化したけれど、家に変えれば息子という役割を演じる日々に変化は無かった。それこそ、両親を演じている二人が変わるわけでもなく、会話上では僕の成績や行いを褒めてくれた。

それだけだった。それ以外に、何も望んではいけなかった。

どうして、僕の目の前で、二人は同じ食卓に着いているのか判らなかった。姉さんの話題は何一つ挙がらなければ、会話らしいものも上っ面の事だけだ。

学校はどうだ。職場はどうだ。

休日はどこかへ出かけようかなんて事もなく、まして、姉さんに会いに行こうなんて会話が挙がる事などありはしなかった。まるで、姉さんという存在が始めからなかったかのような振る舞いに、僕は今まで味わった事の無い気持ち悪さに襲われた。

同じ話が繰り返されるだけで、何の進展もない会話がお経のように毎日続けられているこの食卓はどう見たって異常だった。

慣れたと言えはそうだけれど、それはきっとこの閉塞感ではなくて、両親だと言い張る二人との共同生活に慣れたという事だと僕は思い知った。だからこそ、僕は三人でリビングに居る事に違和感と不快感を同時に味わったし、できる事なら食事だって一緒にしたくは無かった。

ある意味、ある意味で僕は勉強に集中する事ができたのはこの異様な環境だったかもしれなかった。部屋に籠り、難解な数式から、暗号文のような国語の問題を解き明かしていくという戦いが、僕にとって二番目に、安らげる時間となっていたからだ。

姉さんが高校に通うようになってから、僕は携帯電話で連絡を取り合い、会話をした。両親に駄々を捏ね繰り返して買ってもらった物だ。僕の人生で尤も駄々を捏ねた瞬間はこの時だったと言える嫌な自信があった。

電話やメールという間接的な交流から、改めて姉さんが両親を嫌っていた事を知る事ができた。何より、僕が姉さんを好いていたと良く判った。

電話で姉さんの声を聞くのが嬉しかったし、メールのやり取りも楽しかった。多くは無かった

けど、多くないからこそ、本気で悩んでメールの文章を練ったりもした。

姉さんに呼び出されたのは、僕の合格発表を報告した次の日だった。一週間ほど僕は姉さんと連絡を取れていなかったから、夜中に携帯が鳴った時は、少し嬉しかった。

僕は、ベッドに入って夢うつつだったけれど、姉さんからの着信音で眠ることも無く、電話に出る事ができた。

「どうしたの」

こんな夜中に、なんて続けようとしたけど言葉が出なかった。

「おめでとう」と姉さんがいつもの明るい声で言った。

「ありがとう」

まだ眠かったけど、変に目が冴えてしまったのは姉さんの明るい声が、何故か強がっていて、酷く寂しそうに聞こえたからだった。

多分、姉さんも気付いていないほどに些細な変化だったのかもしれないけれど、僕は長年付き合ってきているから、その変化に気付けたのかもしれない。

「どう、気分は」

「別に、普通だよ」

「なんだ。愛しい私の元へ来れるのよ？」

ちょっとだけ心臓の音が跳ね上がった。

「今は、苦勞が報われた事に対する安堵しかないかな」

「つれないわね」

「眠いのは確かだよ」

「明日、会いに来ない？」と姉さんは言った。

時計を見るともう十一時を回っていた。

「明日？」

父も母も未だ家に帰ってきては居なかったけど、それは僕にとって日常で、特に気に留めるものではなかった。

それにしても、突然過ぎて僕は困った。お金も無いし、電車で行くにしても、学校を休む必要があった。

「タクシー代や電車賃くらい出すわよ」と姉さんは言った。

「行くのに、お金が無いよ。二人にお金を貰えるなら、行くと思うけど」

二人が僕に、お金を貸し与えてくれるか判らなかった。

「やっぱり、そうだよね」

姉さんはため息を吐き出した。

「どうしたの」

心配になった。いつもの姉さんじゃなかったから凄く心配になった。

僕はふとんを押しやって、ベッドを椅子代わりに座った。きちんと腰を落ち着けて話さないといけない気がしたのは、きっと僕の中で、これは深刻な話を抱えているんじゃないかという妙な考えが浮かんできていたからだった。

「ちょっとね」

「電話じゃ言えない？」

「難しいわね」

「なら、無理に聞かないけど」と僕は言った。

間が開いた。だけど、姉さんのため息が電話越しに聞こえた。

「ストーカー」と姉さんは言った。

「何？」

「付き纏い」

「誰が」

「私が」

「告白の練習くらいは喜んで受け持つよ」

正直、焦っていたのを隠すのに必死だった。

「馬鹿」

不機嫌そうに姉さんが言った。その言葉に、僕は安堵と不安がごちゃ混ぜになった声が出た。

「されてるの？」

「そうだったら、どうする？」

困った相談を受けてしまったと僕は思った。

「警察には行った？」

「まだ」

「なら、早めに行った方が良いよ。相談だけでもした方が後々面倒になっても対処してくれやすいと思うし」

「そうだよね」と姉さんが言った。

言い淀んでいる気がしたけれど、違う気がした。

「不味いの？」

「ほら、私色々悪い事したでしょ？ 変に学校で噂が沸いても困るかな」

「そうかな」

「そうなのよ」

違和感があった。姉さんらしくはないし、どこかよそよそしい気がした。

「それで、僕にどうしろと？」

「ボディガードでも頼もうかな」

姉さんは力無い声で笑っていた。

「あと一月くらい待ってくれると助かるけど」

「だよね」

「うん」

「ごめん。こんな時間に」

いつもの姉さんはこんな会話をしないし、好まない。何でも即決し、やると決めればまずは行動してみるのが姉さんだった。

「大丈夫？」

「何よ今更」

「警察に電話しなよ。今からでも、誰かに見られているとかでもいいから」

「嫌よ。それにここは寮なのよ？」

寮でも電話するくらい良さそうな気もするけれど、寮に住んだ事の無い僕の知らない事情があるのかもしれないので、ひとまず相槌を打った。

「それもそうか」と僕は言った。

「そうよ」

「何かあったら、すぐ電話して」

「ありがと」

僕は部屋の壁に飾ってあるカレンダーを眺めた。

薄暗い中でも、日曜日は案外と、見えた。

「明後日、そっち行くよ」

「良いよ。無理しなくて」

「行く。下見って言えば親も電車代くらいは出してくれる」

姉さんに会いに行くなんて言わなければ出してくれそうな予感があったけれど、勘でしかなかった。

僕の言葉の後には、妙な沈黙が流れた。何も聞こえてこないほどに静かさが電話越しに存在していた。

「判った。待ってる」

「うん」

電話を切ってから、僕は一睡もすることが出来なかった。

あんな電話をされて、安眠できるはずもないと少しだけ怒りながら、両親の帰りを待った。

どっちでも良いから早く帰ってきて欲しいと、今までの人生でここまで両親の帰宅を待ち望んだ事は無いという悲しい確信があった。

とにかく、僕の腹は決まっていた。

僕は、両親が別々の時間帯で帰宅するのを確認してから、小遣いをせびって家を飛び出した。

両親は何度も僕の携帯に電話をかけたが、一切出ずにタクシーを捕まえて僕は姉さんの元へ向かった。

一回目の電話を掛けても姉さんは出なかった。二回目も出なかったけど、三度目でようやく電話に出た姉さんは、疲れたような声を出して「はい」と答えた。

「今、時間ある？」

「どうしたの？」と姉さんは言った。

「向かってる」

「何処に」

声が変わった。それは何処か嬉しそうで、苦しそうだった。

「そっちに」

「馬鹿」

「馬鹿でもいい」と僕が言った。

姉さんはそれから一分くらい間を開けて喋りだした。

「寮の近くにコンビニがあるの。そこで会いましょう」

「後一時間もすれば着く」

「掛かりすぎ」

姉さんは笑った。

「交通ルールは守らないと」

「それもそうね」

「近くになったら、また電話して」

「判った」

タクシーの運転手は世間話を振ってくる事は無かった。

僕の年齢と電話の会話内容から、色々と想像して口を挟まない事に決めたのかもしれない。だけど、その判断に僕は感謝した。とても今の状態では、タクシー運転手と他愛も無い世間話ができるほど、僕の心は落ち着いていなかった。

コンビニで待っていたのは確かに姉さんだった。店内の雑誌売り場でファッション雑誌を読んでいる姿を、僕は駐車場から見つけていた。

「一時間以内にはまた電話すると思います」

タクシーの運転手さんにそう言うと、僕は店内に入って姉さんに近づいた。それは何処からどう見ても姉さんだった。だけど、姉さんに思えなかったのは何故だろうという疑問が浮かぶのを振り払うかのように、勢い良く店内に入った。

アルバイト店員らしい男の人がレジカウンターから気の抜けた声と、訝しい顔を向けられるという嫌な歓迎を受けながら、姉さんの元へ向かい、声を掛けた。

「お待たせ」

「遅い」

「何読んでるの？」

「流行り物」

そんな他愛も無い会話をしながらも、僕は姉さんを観察した。けれども、何がおかしいのか良く判らなかつた。

「何か買う？」

「ココアかコーヒー」

「奢ってあげる」

「ゴチになります」と僕は言った。

姉さんも笑った。だけど、僕の疑問は消し去れないままだった。

何かが変わった気がしたのに、その何か判らなかつた。変わった所は沢山あるけど、髪の毛は黒に戻っている事も、化粧も薄化粧になった事も今に始まった事じゃなかつたし、服装も今は茶色のコートと赤いマフラーをしているだけで別段奇抜でもなかつた。

カウンターでコーヒーを二つ手にとって、小銭を出していく姉さんの仕草も、特に変わりは無かつた。

「何」

「別に」

僕の観察眼に気付いたのか、訝しげにこちらを見てきたけど、僕は自然を装ってコンビニにある時計を見た。

もうとっくに日が変わっていた。

外に出ると寒い風が吹き荒れていた。その中で、僕と姉さんは黙ってコーヒーに口をつけていた。

姉さんの買ったコーヒーは苦くて、僕の口には合わなかつたけど、姉さんが奢ってくれたものだし、何よりも寒かつたから、僕は黙って飲み続けた。

「ありがとう」

姉さんはそう言った。

視線を向けたけど、姉さんはこちらを見るわけでもなく、力無い微笑を浮かべていた。

「どういたしまして」と僕は言った。

「両親から着信が六件来たけど、無視したらもうかかってこない」

「所詮、そんなものよ」

「そうかもね」

「そうよ」

「うん」

「ねえ」と姉さんは言った。

「何？」

「付き合うって何だろうね」

藪から棒に姉さんは口を開いた。

「いきなりだね」

「そうよね」

厄介ごとだと思っていたけど、姉さんの顔は酷く疲れていたから、なんとか力になってあげたかった。

「元彼氏？」

「違う」

「面識はあるのに判らない？」

「視線を感じるだけ」

違和感が凄かった。僕は今、本当に姉さんと会話しているのか判らないと思ったほどのおかしさだった。

言葉全てが、全部用意されている気がした。

「今は？」

「大丈夫かな」

「ふうん」

僕は聞けなかった。だから、僕は思わず減らず口をたたいた。

「何よ」

「女の子だって気がした」

「失礼な事を言うわね」と姉さんは笑った。

僕も笑った。だけど、すぐに姉さんは真剣な顔になっていた。

「行きたい場所があるんだけど」

「ここから遠い？」

「歩いて行ける」

「なら行こう。行きたいなら付いて行くよ」

姉さんの好きなようにさせたかった。そうしないと、姉さんは姉さんで無くなってしまいうような、怖さがあった。

「ありがと」

「姉さんの頼みだからね」

「本当、生意気な弟になったわね」と姉さんは言った。

「良い師匠に出会えたからだよ」

「誰の事かしら」

「誰の事かな」と僕は言った。

前を歩く姉さんの背中を見つめる。連れ添って歩く事は久しぶりだった。

何年も会っていないような錯覚に襲われているのに、それが判らずにただ歩いて目的地を目指した。

暫くの間、沈黙が続いた。姉さんは少し喋りたそうな事があるかのように、小さく顔を挙げたり下げたりしていたけれど、結局喋り出す事は無かった。

代わりにとは言わないまでも、僕はその沈黙を破るために、日常生活の説明を始めていた。

合格が決まるとやっぱり、姉さんの時みたいに先生たちが掌を返した事、クラスメイトや同じ学年でいつのまにか、知り合いが増えていた事、三人の女子から合格後に告白されてフツた事を始めに話した。それから、父が愛人と喧嘩してその愛人が自宅まで押しかけてきた事、母はそれを知りながらも見なかった事にして、いつもの日常と男漁りに勤しんでいる事と、本当に他愛も無い僕の日常をひたすら話した。だけど、帰ってくる返事は曖昧で気の抜けたものばかりだった。

うわの空という言葉をこういう時に用いるんだという例を、見せられている気分になった。

そう思っている内に、姉さんがある建物の前で立ち止まった。

「ここ？」

「ここ」

雑居ビルだった。

姉さんは堂々と正面から建物内に入ると、慣れた様子で階段を上がり始めたので、僕は無言で後に続いた。

何故、簡単に入り込めたかは、深く考えないように努めながら、僕は階段をひたすら上を目指して昇っていった。

エレベーターがあったけど、姉さんが使わなかったのだから、僕一人で乗るわけには行かなかったし、乗ろうよ、と声を掛ける事も出来なかった。

草臥れた建物内の階段は、外に突き出たような作りで、壁の代わりに鉄柵だった。風の冷たさに身を震わせながら、小気味良く反響する二人分の足音と、吹き抜ける風の音が世界の全てだった。

僕は、前を歩く姉さんの背中を見た。しっかりとした足取りで階段を昇る姉さんを見ていると、僕は不安に押し潰されてしまいそうになった。

息が乱れ始めた頃に、ビルのどん詰まりまで上り詰めることに成功した。

目の前には鉄の扉が侵入を拒むかのように閉じられて、錆びた色が歴戦の戦士を思わせる容姿を作り成していた。

「開けるの？」と僕は言った。

「開ける」と姉さんは言った。

「鍵が付いているわけじゃない」

何故、そんな事を知っているのかを聞く前に、扉は錆びている割りに音も小さく開かれた。

その空間は酷く殺風景で、何より強い風が吹いていたので、寒くてこの場に長居はしたくないと思った。

暗い夜空に鉛色の分厚い雲が覆いかぶさってくるように見えた。

「ここに何の用？」と僕は言った。

「何でだろうね」と姉さんは言った。

一歩ずつ歩きながら、ゆっくりと喋っていた。

「決心が付かなかったの」

「何の」

「でも、すっきりしたかもしれない」

「どうして？」

要領を得ない言葉ばかりだったけど、僕はなんとか相槌を打てていた。

「両親は変わっていないのね」

「うん」

「別れもせずに何をやっているのかな」

姉さんは鼻で笑った。

「演じる事が日常過ぎて、離婚するのも面倒だからじゃないかな？」

両親は何一つ変わっていない勝手な理由を僕は喋ってみた。けれども、それが今の姉さんを変える事になるとは思えなかったし、僕は姉さんが何をしたいのかをなんとなく理解してしまった。

「趣味は合いそうよね」

「男漁りと女漁り？」

姉さんも僕も変わることができたのだから、あの二人だってきっと変わることができはずだった。その機会は何度無く訪れたはずなのに、二人は諦めていた。もしくは怖がっていた。そう思えるほどに、二人は変わる事を拒絶していたんだ。

姉さんは、そんな二人をどう思ったのだろうかなんて、場違いかもしれない考えが浮かんで消えていった。

「お似合いね」

今、目の前で僕に背中を見せて、寒さに震えている女性は一体誰なんだろう、僕はそんな疑問に苛まれた。

姉さんはこんな空気を持っていたのだろうか、思っ手手を伸ばそうとした。けれど、手はまるで僕の腕じゃないみたいという事を聞かなかった。

「どうしたの？」

代わりに僕は、声を出した。

「馬鹿」

「ごめん」と僕は言った。

いつもの姉さんで、いつもの明るい口調だったのに、姉さんはもう姉さんじゃなかった。

「私が死にたいって言ったらアンタはどうする」と姉さんは言った。

「止めたい」

即答した。そうしないといけなかった。

「ありがとう」

金網に手を掛けた姉さんを、僕は何故か止める事が出来なかった。それどころか、一步も動く事が出来なかった。

「でも、無理なのよ」

音を立てて、金網を昇って向こう側の世界へ降り立つ姉さんに僕は声を掛けた。

「理由を聞かせて。僕が何とか出来るかもしれない」

「だったら、もう相談してる」

「聞いてないのに理解なんて出来ない」

「あっ、雪だ」と姉さんが言った。

姉さんの周りを雪が舞い始めていた。

強い風が姉さんの髪を揺らす。雪も同じように揺られていたけど、やがてはコンクリートに着地して溶けていき、染みを作っていた。

「姉さん」

「ねえ、セックスって何だろうね」と姉さんが言った。

「わかんない」

突然の言葉に僕は混乱した。何を伝えたいのかを必死に考えてみた。

「経験ない？」

けれども、判るはずも無かった。姉さんは僕に伝えようとしながらも、絶対にそうすることを拒んでいた。

「あるわけないよ」

どうして僕が動けないのか、解らなかった。助けに行けるのは僕しか居ないのに、どうしても動けなかった。

固まった足に震える唇の先には、揺らめく黒い髪が金網ごしにあって、荒々しいのに、綺麗だった。

「姉の私が言うのもなんだけど、アンタ結構かっこいいと思うけどな」と姉さんは笑った。

「知らないよそんなの」

「セックスってね。気持ち良いと思う？」

「だから知らないって」

僕は声を荒げた。

「全然気持ち良くないの」

けれども、姉さんには僕の声がもう届いていないようだった。

「何を言い出すの？」

「気持ち悪い。ただ、気持ち悪いの。男がただの支配欲だけで女を組み敷いて、優越感と興奮と快楽がごちゃまぜになった恍惚としたムカつく顔をするだけで、こっちの気持ちを考えもしないで、独りよがり気持ち良くなって終わり」

訳が判らなかつた。

僕には姉さんが何を言おうとしているのかを、理解する事が出来るだけのセックスに対する知識と経験が無かつた。

姉さんの声は、掠れていた。もう、戻れない所まできていた。判ってしまった僕自身を恨んだけれど、どうする事も出来ない事は判った。

「こびり付くのよ。忘れられない。まるで、網膜に焼印を押されたように、ずっと纏わり付く。もう無理なのよ、何度も忘れようとしたけど、もう無理なの。自由になりたくて、不良になろうとした。いっそ施設にでも放り込んでくれた方が良かった。だけど、両親はそれをしなかつた。だから私は必死に勉強を始めた。高校も遠い寮生活出来るところ選んだし、そこなら国立だって頑張れば狙えるところだし、頑張ればそのまま大学先で仕事を見つけて、結婚もして」

姉さんは泣いていた。

背中を向けているけれど、泣き声になっていることではっきりと判った。

姉さんは努力した。必死に抜け出そうとしていたことを僕は知っていたし、応援もした。それに、僕を変えてくれた事に感謝もしていた。だからこそ、辛かつた。だからこそ、戸惑つた。

「頑張って、頑張って。その先に自由があると思つてたのに。全てを奪つていったのよ」

「誰？」と僕が言つた。

「誰が奪つたの？」

「知らない」と姉さんは力無く答えた。

その日は一際寒い風が吹いていた。

ひらひらりと雪を舞い散らしながら、静かに降っては溶けていく中、徐々に染みの無いコンクリートの方が少なくなつていった。雪は勢いを増して降りかかつてきた。

姉さんは全てを飲み込んだ。全部、持つて行くつもりだつた。だったら、どうして僕を呼んだ。助けて欲しかつたと縋つてくれたわけじゃなかつた。それが、何よりも悔しくて、何よりも悲しく僕の胸を締め付けた。

僕は、何故、ここに立つて、姉さんの背中を見つめているんだ。何故、立ち尽くしたままで居られるんだ。

「一緒に来る？」と姉さんは言つた。

甘美な響きに聞こえるほどに、艶やかな音色を聞いた。

「どうしても、消えないの？」

「無理よ」

「判らない」

「無理なのよ」

「嫌だ」

僕は叫んだ。

「お願い」

「嫌だ」

「背中を押して」

優しい声で、懇願された。

「嫌だよ」

「最後のお願い」

「死ぬなら勝手に死ねよ」

どうして、死ななければならないのかを絶対に教えようとはしなかった。それは何故なのかを僕は理解できなかった。

何よりも、どうして僕は一步も動くが出来ないのか判らなかった。どうしても、助けたいと思っていたのに、動けなかった。

「お願い」

「死なないで」

泣いていた。

姉さんは泣いていた。

どれだけ、やり取りをしたのかわからないけど、僕は一步も動かなかった。それどころか——僕は泣いてすらいなかった。

「頑固者」と姉さんは小さく呟いた。

僕は、どうして悲しいのに涙を流す事すら出来ないのか解らなかった。悲しんでいるはずなのに、何かがおかしかった。

「良いよ。頑固者で」

「でも、良かった」

姉さんは笑った。

「ありがとう」

下を覗く事は、できなかった。

待っていたのはいつもの日常で、それは本当に何も変わらない日常だった。

僕は寮へ入る引越し準備に追われ、両親はいつものように仕事と趣味に明け暮れていた。

変わったことと言えば、僕が寮生活をするために部屋を片付けた事と、葬式を終えた両親は早々に姉さんの遺留品を処分した事だった。残されたのはアルバムだけという仕打ちだ。

そして、僕が自殺現場に通うようになった。それだけだ。

後は何も変わらない、朝起きれば両親と食事をしてテレビを見て、父は仕事に出かけて、母は適当に洗物を済ませると、同じように家を空けていくだけだ。

僕は、卒業式と寮生活のために移動しなければいけない日が近づいてきていた。

そんな毎日が日々平穏に感じられて、両親は姉さんが始めから居なかったと、思っているかのように、何事も平坦に過ぎ去っていった。

「どうしてだろうか」

僕は一文字ずつ区切って言葉にした。

ベッドに寝転んで、天井をただじっと見つめながら、色々な事を考えた。僕の歩んできた短い人生と、両親の事、そして姉さんの事を考えた。

でも、どう考えたって、あの時の姉さんを救う方法が思い浮かばなかった。あの場面になると、僕は一步も動けなかった。どんな言葉を考え付こうと、絶対、助け出そうと意気込んで、妄想して見ても、どういうわけか結果はいつも同じだ。

姉さんは飛び降りて、僕は動けないままの光景だけが、脳裏を駆け抜けていった。

「どうすればいいのだろうか」

僕は先ほど同じように言葉を出した。

どうして死んだのか、という意味もあったけれど、もっとドス黒い何かがあった。むしゃくしゃしている、なんていう言葉が今の僕にはお似合いだった。

姉さんは声を殺して、何もかも持ち去って死んだ。

何故だろう、数える事もしていなかったけれど、もう何十回と自問自答した言葉だった。

相談してくれれば何とかあったのかもしれないという気持ちは、今でもあった。僕でも解決できない内容だったかもしれないけど、僕はその中身を知りはしないのだから、無理なんて思えるわけなかった。

だからこそ、姉さんが僕に相談しなかったのは何故なのかを理解する事が出来なかった。どうして、僕をあの場に呼んだ。理不尽すぎる現場に居合わせた僕の事など、考えもせずに死んだ姉さんに失望すらした。僕に言いたい事を言ったつもりで、肝心な事は全然喋ってくれなかった。

今でも無性にその事が悔しくて、そして、許せなかった。僕の無力さを……、なんて綺麗なものじゃなかった。

溜め込んだ感情は、どこかで吐き出さなければならなかった。

人間はそうやってストレスを発散していくのだから、僕もそうする必要があった。それも、爆発させるほどにぶちまけたいと思った。

恨む矛先は自然と向けられ、違和感は何一つ無く、諸悪の根源はお前達だと素直に思えた。だ

から、僕は行動した。姉さんがあの時行動したように、僕に道を指し示したように動いた。

平然としているのはおかしいと、どうして演技すらしなかったのかと、今ままでずっとしてきたのに、ここにきて全てを素のままに、粛々に行ったのが許せなかった。体裁を保って欲しかった。そうすれば、きっと僕はこの平凡たる日常に、耐える事ができたかもしれなかったんだ。だけど、そうしなかった。

だから、僕は我慢できなかった。

姉さんの死だけは両親である事を、辞めた男と女はきっと姉さんを恨んで、嫉んで、どうにかしたかったんだ。

手を煩わせたからかもしれないし、姉さんは僕の知らない内に、恨み妬みを買っていたのかもしれないけれど、姉さんにそう仕向けたのは結局自分達のちぐはぐな生活観が原因で、その責任を請け負う必要があったはずだ。

だからこそ、姉さんを最後まで両親を演じたまま吊って欲しかった。それをしなかったのは、仕返しをしたかったんだと思った。

小さい事だ。ちっぽけ過ぎる仕返しだ。それでも、僕には堪えた。

そんな事をするなら、施設にでも入れれば良かったんだと思った。きっと、両親だったものは考えたはずだ。だけど、姉さんの願いをどこかで察し、知っていたから、ずっとあのままだった。

今までの生活から飛び出したい姉さんは、必死に勉強をし始めたのを見て、両親だったものは何を思っていたんだろうと考えて、僕は胸が詰まった。

姉さんが必死に勉強すれば、周りからの評判は上がり、両親も褒められる機会が増えていたから、内心でほくそ笑むくらいはしていたかもしれなかった。

姉さんがもがくほど、両親だったものの評価も上がってしまった。それを、見越していたのだとしたら、僕は何をすれば良いかを考えた。

だからこそ、鬱憤を晴らしたんだ。そう結論づけていたのは、両親だったものも、僕と同じ人間で、誰かを好きになる事もあれば、嫌いになる事もあるはずだからと思ったからだ。

それが、自分の娘だったとしても、あの二人はきっとそう思っていた。

嗚呼、『平凡』だと思った日常と僕は死んだんだ。

その日を境にして、僕は坦々を装って、淡々とやりたい事を考えて、ただ、実行した。

気付けば背中のコートを、しっかりと掴まれていた。

相変わらず、暗い世界の隅々まで駆け抜けていくように、寒い風が吹いていた。

もう足の感覚も無くなっていたけど、辛うじて立っていたのは小父さんが掴んでくれたからだった。

「だから、殺したのか」と小父さんが言った。

「うん」

今も、両親だったものは自宅という虫籠の中で、死に絶えているはずだ。腐敗が進んでも、冬の涼しい気温で異臭も発生しにくいと僕は勝手に思っていた。

父だったものは包丁で刺した。きちんと両手で握り、刺しやすい腹部を狙い、体重を乗せて思い切り突き刺した。倒れ込む父だったものを引き摺りだすと、口にタオルを無理やり詰め込んで、ガムテープをぐるぐる巻きに固定した。両手足も同じようにしてそのまま放置した。

母だったものは、父だったものが寝室で死んでいる事を知らずに帰宅して、血に驚いた所を襲った。

ロープで首を思い切り締め付けた。始めは抵抗したけど、意識を失うのを待ってから、キッチンの椅子に丁寧に座らせると首にロープを巻き付けて、正座するように足を縛った。ロープとガムテープでしっかりと固定して、起きるのをじっと待った。

起きてからは簡単だった。母だったものは混乱して自分から椅子から落ちて首を吊った。足が伸びれば助かるほどの低い位置で、僕を見つめた。僕は、痙攣を始めて汚物が撒き散らされるまで、黙って見続けた。

これは、僕の義務だと勝手に思い込んでいたけど、やり遂げた。

「それで？」と小父さんは言った。

「僕は迷った」

「迷う」

「このまま、僕は姉さんを変えてしまった男を捜すのか。大人しく警察に往くのか」

本当なら、すぐにでも警察に行こうと思っていたのに、気付けばこのビルを昇っていた。感傷、なのかもしれないけど、そんなものよりずっと鮮明だと思った。それこそ一字一句と忘れていなかったし、どうやって飛び降りたかも全部、覚えていた。なのに、どうしても僕には解らなかった。

姉さんの気持ちを理解してあげることが、出来なかった。

「本当にそう思っていたのか」

小父さんの堅い声が風に揉まれながら、僕の耳に入ってくるけれど、身体の自由はもう利かなくて、いつ死んでもおかしくはないと思っていた。

「本当に？」と僕は言った。

「お前さんは、逃げ道を巧く用意しただけじゃないかな」

小父さんの空気が変わり、僕の震えが一層激しさを増していくのにも関わらず、僕の両手は、金網の柵をしっかりと握っていた。それも、感覚も消えてしまっ て真っ赤になっている指先を、

しっかりと金網の柵に食い込ませていた。そして、背中相変わらず小父さんの堅い手で握られていた。

「逃げ道？」

「そうだ」

小父さんは言った。

「お前さん本当に、悲しんでるのか」

その言葉に、僕は少し怒りを覚えた。

「小父さんには判らないよ」

小父さんは、僕と姉さんの繋がりを知らないし、僕の心なんて解るはずも無かった。

「判る判らないの問題かね？」と小父さんは言った。

嘲笑されているような錯覚に僕は声を荒げた。

「僕は、姉さんの事が好きだったんだ。なのに、守ってやれなかった。苦しんでいたのに、相談に乗ってあげる事さえ出来なかった」

「お前さんとお姉さんが恋人関係みたいだったのは判るさ」

「そんなんじゃないよ」

「いや、素直に考えろよ。本当に、お前さんは家族として好きだったのかを」

「何を」

訳も無く僕は、僕自身の震える声に動揺した。

「お前さんは、どうでも良かったんだよ」と小父さんは言った。

「どうでも？」

「そう、姉さんが死のうが死ななかりょうが、レイプされようがされまいが、どうでも良かった」

「僕は、姉さんが好きだった。大好きでずっと一緒に居たかった」

僕は大声を挙げた。

「お前さんは、姉さんよりも両親を殺す事だけで頭が一杯だったんじゃないのか」

「一体、何を言い出すんですか」

空は、未だに雪を降らせようという気配は無いけれど、ただひたすら冷たい風が吹き荒れているだけで僕の身体を凍えさせた。その耳障りな風の音が僕と小父さんの隙間をわざと通り抜けていった。

「何が不満だった」

「不満？」

「愛されなかったのがそんなに辛かったのか」

「辛いなんてものじゃないでしょ。普通は」

「お前さんは、その普通じゃ飽き足らなかった」

小父さんは何を言っているんだ。そんな事、あるはずがないし、僕は姉さんを愛していた。大好きだった。

両親に、愛されていなかった事を言ったのかとも思った。それこそ、僕はもう諦めていたし、今更愛されても逆に困ったはずだ。

「お前さんは姉さんに愛を求めた」

僕の動揺を他所に、小父さんはそう言った。

「何の話です」と僕は呟いた。

「姉さんも判ってくれてたんだろうな。一生懸命演じてくれた。だけれど、我慢できなかった」

僕は初めて、振り返った。

「お前さんは姉さんを愛していたんだと思う。それは本当かもしれないが、姉さんはそういうわけには行かなかった。お前さんからの愛を巧く避けていたんじゃないか」

首を横に回して横目に小父さんを眺めた。

「それに気付いてしまった」

酷く、無表情で冷たい顔をしていた。

「お前さんは、それを知った時、どう思ったのかは知らない。だが、それからじゃないか。本当に、姉さんを愛する事が出来なくなったのは」

鼻水をすする音が聞こえても、小父さんの表情は凍ったままだった。

「意味が判らない」

「本当に、姉さんを愛していたのに、お前さんは途中から、両親を殺す事ばかりを思い描いて、遂には殺すという行動を、実行に移した。理由なんてものは些細で良かったんだ。捕まった時に、少しでも情状酌量の余地があればそれだけで十分だと思っていたんじゃないか」

「貴方に何が判るんですか」

「判らないね。これは、私の単なる想像だ。お前さんと出会ってから考えて来た話」

小父さんは突然、顔を緩めて笑った。

「お前は、両親を愛そうと努力した。本当に、駄目な親だったかもしれないけれど、家族というものは互いに愛し合うものだと、お前さんは思っていたはずだ。だから、学校の授業参観は嫌いだった。本当の両親を見るのが嫌で、自分の両親が学校に来る事もないのを知っていたから」

「家族なんだから、そんなもの当然の努力じゃないか」

視線がぶつかり合っても、そこには熱は感じられなかった。僕の独り言、自問自答のように思えてくるほどに、小父さんは実体が見えてこないのだけれど、小父さんは僕の視線の先に居るのは確かな事だった。

「そうだね」

僕は今、どんな顔をしているのだろうか、そんな事を気にかけた。

「愛されようとしても、愛してくれなかったのは何故なのかも考えてしまうのは当然だった。そこでお前さんは行き着く。姉さんが居る事に、姉さんは愛されていた。そうだよね。本当は、頭も良く、活発で明るくて社交的だった姉さんは、学校も家でも皆から愛されていた。だから、お前さんも姉さんを愛した」

「自慢の姉さんだった」

顔を背けるように、僕は金網から視線を外し、外に身体を向けた。

「だから、お前さんは姉さんと同じになりたかった。姉さんと何でも共有したかった。家族以上に親密になれるように。全てから愛されている姉さんを自分のものにすれば、皆から愛される存在になれるのかもしれないと願った」

「僕は、姉さんを愛していた」

「結果は変わらなかった。皆の愛した姉さんはお前の、愛憎に殺されて、両親もお前さんに期待こそすれど、愛しはしなかった。勉強を必死に頑張ったところで、お前さんは誰からも愛されていなかった」

「僕は、姉さんをただ愛したかった」

「お前さんは両親を殺す事ばかりを考え始めたのは何故だ？」

そうなのだろうか、僕は、本当にそうなのだろうかと考え始めた。

「知ってしまったんだ、何もかも、両親は姉さんですら愛していなかった。ただ、頭の良い娘というだけで将来に期待こそすれど、決して愛してなどいなかった。その証拠に、葬式で両親は泣いたのだろうか。その後の生活に暗い影を落としたか？」

「両親はただ、役を演じているだけだった」

「許せなかったよな。自分が愛した人でさえ、愛されるべき両親に見放されていたという事実を突きつけられて、やっぱり両親はただ父と母を演じているだけという事を、見せ付けられた。そして、戻った平凡な日常に、今まで以上の閉塞感に苛まれた」

ため息を吐いていた。気付けば、黙って小父さんの言葉に、耳を傾けている僕が居た。

「お前さんは両親を、ずっと両親を殺したかっただけだったんだ。そして、今願いが叶った」

「僕は……」

「お前さんはただ、死ねば良いんだよ」と小父さんは言った。

「そこから飛び降りて、全てを終わらせれば良い。何もかも忘れ去って、姉さんに謝りに行くんだ」

小父さんの声が和らいでいた。

姉さんを愛していた事は真実だった。両親を恨んでいたのも事実だった。だけれど、僕はこのまま、死んで良いのか判らなかった。

見下ろせば、何台かの自動車が過ぎ去って、黒い世界を照らしていくのが見えた。

僕の身体は硬直してしまっていたけど、その硬直は、死が怖いから起こっているのかもしれないし、もう寒くて寒くて、身体がいう事を利かずに固まってしまったのかもしれない。

「僕は」

姉さんを愛していた。

小学校の頃からずっと、中学に入って、今でも愛している事に変わりは無かった。

姉さんは僕に言ってくれた。私も好きだと、僕に囁いてくれた。

セックスをしたいと思った事は何度もあるけれど、結局、僕は怖くて抱けなかった。姉さんから手ほどきをしてくれるという事も無かった。けれど、きっとそれで良かったんだと思った。姉さんは抱かれる事だけは咎めていたんじゃないかと今なら、解る気がした。

それでも、僕は今でも姉さんを愛している事に変わりは無かった。

両親の事だって、そうだ。愛されたかったし、愛そうと努力したけれど、僕には何の愛情も注いではくれなかった。姉さんが中学校に入って不良になっていかなかったら、僕はもっと早いうちに両親を殺していた。

僕は、やっぱり両親を恨んでいたんだ。だから、殺した。

「耐えられなかったんだ」

「そうだな」と小父さんは言った。

「姉さんが死んだのに平然としている両親と、いつもの朝が耐えられなかった。どうして、両親はあんなにも淡白に、暮らしていけるのか理解できなかった」

姉さんの写真は今でも、僕の部屋だけに飾ってあるだけだ。両親と一緒に撮った写真は一枚も無いけれど、僕と姉さんが写った写真はあった。

「喋っているのに、全てがすり抜けていくんだ。それなら、まだ壁に語りかけた方が良かったかもしれない。話しかけた相手は人間なのに、無機物の壁よりも冷たかったんだから」

「だから、殺したんだろ」

小父さんの声は優しくかった。

「それで良い。お前さんは十分にやったんだ」

「姉さんは、愛されていない事を知っても、生きていこうとしていた。だけど、両親は姉さんを見ようとしなかった。寮へ移って清々したとさえ思っていたんだ」

姉さんは死んだ。それは事実なのに、肝心なものが出てきていなかった。

僕は気付いていたはずだ。どうして、姉さんは飛び降りた？

「姉さんは、何故死ななければいけなかったんだ」と僕は呟いた。

「姉さんは、死にたかったんだよ」

「死にたかった？」

「両親に愛されていない。そして、お前さんの愛に押し潰されたんだ。お前が姉さんを死に追い遣ったんだ」

小父さんは優しく僕に語り掛けてきた。

「僕の責任」

「そうだ」

「僕は、死ぬしかないの」

「死んで、謝ってくれば良いだけの話だ」

どうしてか、疑問が湧いて出てくる。とても、大事な事を忘れようとしていた。

「姉さんは、泣いていた」

「悲しんでいたんだろう」

「姉さんは、笑っていた」

「お前に最後を看取ってもらえたからだろう」

なんだ。

それは、なんなんだ。僕はそう呟いていた。

全然、意味が分からなかった。

「どうして」

「何？」

小父さんの強張った声が聞こえた。

「間違ってる」

「間違っていない」

「僕は姉さんを殺していない」

「お前さんが追い詰めたんだ」

「どうして、姉さんは僕に背中を押してと言ったの」

「お前に殺して欲しかったからだろ」

「どうして」

「愛していたからだ」

「なら、どうして死のうと思ったの」

「お前の愛に押し潰されたからだ」

意味が解らなかった。

「違う」

「何が」と小父さんはイライラと声を出した。

「姉さんは、僕の責任で死んだわけじゃない」

「今更、何を言っている」

「姉さんは、必死に生きようとしていた」

姉さんは、両親に愛想を尽かしていた。

僕が必死に両親から寵愛を授かるうとしていた最中、姉さんは一人で生きていこうと、決心していたんだ。

そこに、どんな思いが込められていたのかを、知る術はもう無いけれど、姉さんは中学校の終わりには、綺麗さっぱり不良活動を休止して、勉強にどっぷりと浸かっていたんだ。

毎日、勉強して、必死の思いをして今の生活から抜け出せるのを目標に、寮生活が出来て、将来の事を考えて進学校へ入学した。有名大学への入学者も出す学校に行った姉さんが、そう簡単に死ぬなんてありえないんだ。

姉さんは、自由に生きようとしていた。だから、一人暮らしを始めたんだ。

それなのに、僕を気遣ってくれていた。僕に勉強を教えて、僕に生きる道を指し示してくれた

。

私と同じところに来なさいと、言ってくれた。だから、僕は努力して姉さんと同じ学校へ入学を決めた。成績は絶対に危ないだろうけど、後ろから数えた方が早いかもしれないけれど、それでも姉さんと一緒なら頑張っていけると思った。

姉さんが大学に行けば僕も大学に行ったはずだ。きっと姉さんは同じ大学に来なさいと誘ってくれたかもしれないけど、僕はその時こそ、断ったはずだ。

「僕は、一人で生きていく。姉さんも、姉さんだけの人生を生きて良いんだ」と僕は呟いた。

「は？」と小父さんは呆れた声を出した。

「僕は、姉さんに恩返しをしたかった。だから、高校を卒業して大学に進学する時、きっと僕は姉さんと違う大学へ行くと姉さんに言ったはずだよ。姉さんはもう僕の事を考えなくて良いんだと胸を張って言える時だと思ったから。姉さんにはっきりと言うつもりだったんだ。ありがとう。姉さん、今までありがとう。だから、姉さんは本当に、姉さんだけの道を歩んで良いんだって」

「何を言っている？」

「姉さんは、何故自殺したのかを調べなければならない」と僕は言った。

「お前が殺したようなものだろ」と小父さんは言った。

「違うよ。だから、僕は警察に出頭する。全部の罪を償ってから、僕の人生を賭けて、姉さんを救い出す」

それが、今の僕に出来る事だと思った。

姉さんが死ぬことを覚悟した時、どうして僕と一緒にここへ来たのかを理解したように思えた

。

姉さんもきっと、僕を愛してくれていた。僕だって、愛していた。それでも、姉さんは僕の見えない、僕の知らない僕までも愛してくれていたに違いないと、今なら思えた。

それなのに、僕の前で笑って、僕の前で泣いて、僕の前から居なくなってしまった。

それは、何故だ？

死ななければならないほどの出来事を体験したからに他ならないんだ。

「お前さん、それ本気で言っているのかい？」と小父さんが言っていた。

僕は、固まって動かないと思っていた身体を思い切り、反転させた。

小父さんの手から背中を引き離し、金網の柵をしっかりと握りなおして、小父さんを真正面から見つめた。

小父さんの顔を強張っていた。寒さからか、きっと僕の顔も強張っているだろうし、青白く気味が悪いからかもしれなかった。

「姉さんがどうして死ななければならなかったのかを調べる」

「姉さんはお前さんが殺したようなものだ」

「違う」

「違わない」

「じゃあ、何でだ」

「それを、これから調べていく。だから、警察に行って両親を殺したと言って逮捕される」

「本当に」と小父さんは言った。

「それでいいのか」

僕は頷いた。

「もう決めた」

「そうか」

小父さんはそう言ってから、上を見上げた。僕も釣られて空を見上げると、どんよりと垂れ下がる鉛色の雲間から、白い粒がひらひらと落ちてきていた。

「雪だな」と小父さんは言った。

「そうですね」と僕は返した。

「あの時と同じです」

「そうか」

小父さんの顔は笑顔だった。

「もうコートは必要ないよな」

「お世話になりました」と僕は言った。

「気にするな」

僕はコートをその場で脱ぎ始めたのは、今すぐ返した方が良くなんとなく思ったからだった

。

小父さんは微笑みながら、コートを受け取って小脇に抱えた。その顔は、とても安らかに見えて、僕はなんだか嬉しかった。

話して良かったと思えたのは、きっと僕のやるべきことが見つかったからでもあり、姉さんへの思いが本当だった事を、改めて実感することができた。

僕は、生きる意味を見つけていた。両親だったものを殺した事に後悔なんて微塵も感じないけれど、僕は生きるために警察に行って刑に服す決意を決めたのは、殺す相手を絶対に許さないと決めたからだ。

遠回りだと思うけど、姉さんはきっとそれでも許してくれるだろうと勝手に思うことにした。ケジメをつけろと怒られそうだったのは僕だけの秘密にしながら、金網を昇ろうかと思った

。

手が悴んでいて、感覚が消えていた。

「じゃあな」と小父さんが言った。

空は、あの時と変わらず、不機嫌な顔をのように曇り空で、その隙間から風に揺られる雪たちが、ゆらゆらと舞い降りてきていた。

僕は、目を閉じなかった。

ただ、空を見つめて流れるほんの数秒だけ、姉さんが見たのはこんな景色だったのかと思っていた。

小父さんは笑っていたのだろうかと考えたけれど、結局のところ、最後に見えたのは、小父さんの右手だけだった。

僕は、僅かばかりの街灯が照らす真っ黒なアスファルト目掛けて、重力に引かれて落ちていった。

(了)